

## 祝！「New Glass」100号記念号発行



(独物質・材料研究機構 ナノスケール物質萌芽ラボ)

井上 悟

(Serial. No. 21~28 編集長)

New Glass 誌 100 号記念号発行おめでとうございます。

2 代目の編集長の川副先生から 3 代目の編集長を仰せつかったのが 1991 年であるが、その 2 年前から編集委員としてお手伝いをさせていただいた。当時はちょうど、後にバブル景気と呼ばれたが、世の中の景気が頂点に達していた頃で、当然ながらニューガラスフォーラムも多数の会員会社の加入により予算的にも恵まれていた頃である。要するにニューガラスフォーラムも景気が良かったわけである。川副委員長時代には、国内外のニューガラス研究のシーズを網羅することでニューガラス研究を振興することを目的としていたので、“目指せ 100 ページ” を目標に特集号を編集しており、引き継ぎ後も当初同様の方針で進めていたと記憶している。国内外の話題を対象としていたが、実際には国内の話題が多く当時の日本のガラス関係研究者及びエンジニアの奮闘ぶりが伺える。ニューガラスのブームが頂点から少し下降気味であったので、記事を集める編集委員の方はかなり大変であったことと思う。昔から“3 代目にはなんとやら” のたとえもあるので、とにかく 2 年間各号 100 ページ近くで仕上げることに努めたが、今当時の号を見てみると多くて 80 ページくらいであったようである。また、当時は表紙を各号ごとに変えていたためニューガラス関連の表紙の写真を集めるのも大変な仕事であった。

ガラス産業界のサポートでガラスプロセス研究会（主査：山根正之東工大教授）が発足（1992 年 10 月）したのもこの頃で、ガラス製造プロセスの諸問題を産官学共同で研究することとなり、ニューガラスフォーラムの開催するニューガラス関連研究会と共にガラス研究の推進に大いに貢献したことも思い出される。

2 年間幸いにも大過なく務めさせていただき、後を京都大学の横尾先生にお願いして引退させていただいたが、その後程なくしてバブル景気が崩壊し、その余波の会員数減少によりかなりの予算削減が必要となり雑誌編集が大きな制約をうけることとなってしまった。横尾先生には真逆の縮小方向での編集をお願いすることになりお詫びした記憶がある。

NEW GLASS 誌を創刊号から並べてみるとその雑誌の厚みから歴史が伺える。正に日本の経済状況の反映でもあるのだが、川副先生から井上が関係した頃に急激に分厚くな

り、その後かなり薄くなり、そして、50号辺りから復活して現在に至っている。しかしながら、雑誌の厚みだけが研究の充実ぶりを示すわけでもなく、むしろ四半世紀に渡って関係各位の協力により100号まで継続して発行されてきたことを大いに評価すべきである。これも産官学の関係の賜であり未来永劫大事にしたい結びつきである。

今後も絶えることなく本誌が発行されんことを願ってお祝いの結びとさせていただきます。